

# 先人の知恵から

## 35

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今年の冬は雪が多く、また寒さもいつまでも続き、早く春が来てほしいと思う今日この頃。発刊のころには梅が咲いているだろう。最近認知が怪しくなってきたが、できる限りこの話を続けて行けたらと思う。

今回は「す」「せ」のところから以下の9つ。

- 寸にして之を度ればはか又じょうに至りて必ず差たがう
- 生ある者は死あり
- 臍下丹田せいかたんでん
- 柄鑿相容れずぜいさく
- 西施にも醜なる所有りせいし
- 精神一到何事か成らざらんせいしんいつどうなにこと
- 清濁併せ呑むせいだくあわ
- 急いては事を仕損じる

く寸にして之を度れば

丈に至りて必ず差う>

ことを行う場合、煩雑であればあるほど過失を生じやすいことの例え。物を測るには、それにふさわしい尺度があり、大きなものを一寸ずつ削っていくと、一丈になった時には誤差がたまって大きな差が出るということから。

出典 淮南子

母親の面談を行っているとき、小さいことに気を配り過ぎて、結局全てが上手く行かなくなって嘆いている方に出会う。子育てというのは複雑なものである。一人しかいなくても、自分とは異なる個体であり、様々な動きや反応がある。その一つ一つに細かく細かく対応するのは苦しい。また複数の子どもがいれば、同じ兄弟であっても一人一人性格も発達も異なる。それぞれの子どもに、こまごまと対応していくことなど実

は無理な話なのである。手が回らないこと、気が回らないことは人間である以上当たり前のように起こりうる。それを防いで完べきに完べきにと、細かいところまで気を配って子育てをしているうちに、母親が目指していた子育てとは全く異なったことになってしまうことはままある。

子どもを育てるときに、まっすぐに育てようと思っただけでも、ほんの少しずれが出来れば、その先の子育ては、そして子どもの様子は、はじめ考えていた子育ての未来とはかなり隔たりができる。子育ては失敗の連続。上手くやろうとしなくても何とかなるものである。完べきをめざせば目指すほど誤差が大きくなる。子育ての結果を大まかに見ていけば、誤差はその範囲内に収まるので誤差とはならない。細かく見れば見るほど誤差を大きく感じてしまうし、実際大きくなってしまふのだ。そんなことを伝えるためにこのことわざを使うことがある。子育ては適当、程々、好い加減。

### <生ある者は死あり>

生きているものは、いつかは必ず死ぬ時が来る。生命は永遠のものではないということ。「生あるものは必ず滅す」ともいう。出典には「生ある者は必ず死あり、始めあれば必ず終わりあるは、自然の道なり」とある。盛者必衰、生者必滅も類義。

出典 ようしほうげん 楊子法言

これは当たり前前の事なのだが、時々、永遠に生きていると思っているのではと感じる人に出会う。特に家族関係でいえば、嫁姑問題などである。人は年を取れば、妙に

頑固になって物わかりが悪くなる人もいるし、認知の問題が起これば、嫁に対してあらぬ疑いをかけるなどということも起こる。性格的な問題を持っている老人も時々みかける。舅姑は、嫁にとってあまりうれしい存在ではないことが多い。しかし、舅姑はほとんどが嫁よりかなり年上であろう。人生 100 年時代に突入するかという今の時代、中々舅姑の死というのは想像できないのかもしれない。しかし、そういった確執も未来永劫続くわけではなく、いつかは終わりが来て、自分たちの時代が来る。結婚当初から同居という家もあるだろうし、もちろん舅姑が元気なうちは距離をとって過ごすこともできる。どちらかが倒れたから、あるいは亡くなったから同居することになったという方も多いただろう。最近の舅姑はどちらかというところ遠慮がちな方も増えている。互いにある程度の距離を取り、間に境界をしっかりと引き、いずれは亡くなっていくと考えることで耐えられる日々も増えるのではないかな？そんな思いを伝えるためにこのことわざを使う。

### <臍下丹田>

臍の下三寸（約9センチメートル）の所にある体のツボの事。ここに力を入れて意識を集中すると、健康を保ち勇気が湧いてくるとされる。多く「臍下丹田に力を入れる」の形で用いられ、物事に動じない、どっしりと落ち着くという意。

育てられ方の問題もあるのかもしれないが、とにかく自信のない人が多い。「自信を持つこと＝驕る」だから謙虚であれねばい

けない、つまり自信を持たない」となっているのではと思ってしまう。「謙虚であること」と「自信がないこと」は、まったく別物である。しかし自信がないために、多々ある情報に惑わされたり、あちこちふらふらする。芯がないのである。そういう保護者に育てられる子どもは大変である。どうしたらよいかわからなくなるだろう。

ふらふらした保護者と出会う度に「地に足がついている感覚はある？」「芯がしっかり立っている感覚はある？」と聞いてみると、口をそろえて「ありません」と答える。子育てをするのに、保護者がふらふらしていたのでは、子どもは迷ってしまう。特に思春期の揺らぎの大きい時期に、保護者がふらふらしたら、思春期の揺らぎはもっと大きくなってしまう。そんな保護者にこの言葉を伝えて、丹田の位置を確認する。どんと構えなさいと。不安が強いからふらふらするということもあるので、「大丈夫だから」というだけで落ち着く保護者も多い。

どんと構えられない保護者のもとで、子どもが不安になっているのは当然である。保護者がどんと構えることで子どもも「ああ、大丈夫なんだな」と思えるのである。最近は保護者だけではなく、子どもたちにもこのことわざを伝え、丹田を意識させることも増えた。自信が揺らぎそうになったら、今一度丹田を意識して、背筋を伸ばし、呼吸を整えてみよう。それだけで物事の見え方も違ってくるものだ。

#### <柄鑿相容れず>

意見や物事が食い違って合わないことのため。性質の違ったものは協調できない

ということ。四角なほぞは、丸い穴にはびたりと入らないということから。柄は木を組み合わせるときに、一方の材木の端に作る突起物。ほぞ。鑿はほぞを入れる穴。

出典 楚辞由来ともされるが、史記が出典ともされる。

子どもたちでも保護者でも、だれでもあの人とは性が合わないと思うことはあるだろう。相性というのは確かにあるかもしれない。ただ、相手が丸い穴なのに、自分の四角いほぞを入れようとしたって無理な話である。相手の丸い穴に合わせて、自分の角を落とすことが必要になる。

大人も子どもも人間関係を上手く保つには、相手が変わればよいと思っている人が多い。夫婦でも同様である。相手と良い関係を保とうと思うなら、自分の角を落としてみることも、自分を変えてみることである。自分を変えるのは人を変えるより何倍も簡単なのだから。相性が悪いからと絶縁してしまうという今の分かりやすいが極端な人間関係に対し、こんな諺を使っている。昔から悩みは一緒なのである。

#### <西施にも醜なる所有り>

完全無欠な人間などいないという例え。その反対に、まったく取り柄のない人もいないということ。有名な美人である西施でも、よく見ればどこかに欠点があるものだということから。西施は春秋時代の越の美人。出典 淮南子

どんな美人でもどこかに欠点がある。性格が悪いこともあるし、美人薄命で不健康

だったりすることもある。美人で頭も良く運動能力も高く、性格も良く、と何拍子もそろった人はそういるものではない。自分と比べて、あの人は凄い凄いうらやんでいる人に出会うと、こんな諺を出して、美人にも欠点があるし、反対に全くとりえのない人もいないということを伝えている。自分の欠点は直ぐに見つかるが、良い面というのは中々見つけられないものだ。

#### <精神一到何事か成らざらん>

精神を集中して努力すれば、どんなに難しいことでもできないことはないという教え。精神力の大切なことをいったことば。「石に立つ矢」、「一念岩をも徹す」なども同義語。 出典 朱子語類

この言葉は良く知られていると思う。精神力がいかに大切か。集中すれば何とかなる。もちろんそれでも上手く行かないこともあるだろうが、冬季オリンピックを見ながら、改めて思う。

今はやりの「鬼滅の刃」の漫画でも、「全集中」という言葉が出てくるが、要は精神集中の事である。集中というのは中々続かないもので、すぐ気が散ってしまう。これは筆者自身も苦手なところである。

そこで自分自身への戒めとしてもこの言葉を使っている。最近の子には「全集中」の方がわかりやすいが・・・。

英語では・・・

It is dogged that does it.

(努力すれば事は成る)

Nothing is impossible to a willing heart.

(意欲的な心の持ち主に可能はない)

#### <清濁併せ呑む>

善人も悪人も差別しないで来るがままに受け入れる。度量の大きいことの例え。包容力が大きいこと。大海は清い流れも濁った流れも同じように迎え入れることから。

子どもたちと話していると、「あの人はああだから嫌だ、この人はこうだから嫌だ」と、嫌なところを探しては、拒否していく子がいる。あるいは、やけに正義感だけが強く、間違っただけ、ちょっとした誤りに対し、これでもかというほど非難する子どもや大人にであらう。何が正しくて何が間違っているか、あるいは自分の物差しは本当に正しいのか？そんなことを話しながら、この諺を伝えて、人は心を広く持っている人、度量が大きい方が誰とでもうまくやっていけることを説く。

英語では・・・

Take the rough with the smooth. (すべてすべした物と一緒にざらざらした物も受け入れよ)

#### <急いては事を仕損じる>

物事はあまりあせるとやり方が雑になったり、注意力が散漫になったりして、かえって失敗しやすいということ。気がはやるときほど落ち着いて考えて行動すべきであるといういましめ。「急いては事を過つ」ともいう。

この諺は有名なのであえて説明することもないだろうが、せっかちな人、落ち着きのない人、あせっている人に会うとこの諺を伝えるようにしている。車の事故、あせっているときにおこるものである。

よく相談に来た人に言うのだが、1秒遅れたらその仕事にどんな問題が起こるのか考えてみて。一呼吸置いたところでそんな大きな問題は起こらない。100m走などの競技なら別だが、大抵の仕事はそこまで焦る必要などないのだ。一旦立ち止まり、一呼吸してから、考えてから取り組んだ方がミスも少ないし、結局その方が速いと言うことも真なのだ。「慌てない慌てない、一休み一休み」

英語では・・・

Haste makes waste. (性急は無駄を生む)

The more haste the less speed. (急げば急ぐほどうまくいかない)

出典説明：

#### 淮南子・・・内編二十一卷

紀元前二世紀、前漢の武帝の初期に成立した哲学書。編著者は、前漢の高祖劉邦の孫である淮南

#### 楚辞・・・十七卷

中国戦国時代末期の楚の歌謡を基盤とし、愛国詩人屈原とその門人たちの作品、および漢時代の模倣作を集めた所。前漢の劉向が編集した十六巻に、後漢の王逸が自分の作品を加えて十七巻としたものが現存する。長編叙事詩が多く、屈原の「離騷」はその代表作。

#### 史記・・・百三十巻

中国古代の史書。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏・殷・周・秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本記（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

#### 楊子法言・・・十三巻

前漢の楊雄（ようゆう）撰の思想書。『論語』の体裁にならって、問答体の形をとりながら学問や修身・孝行などの道を論じている。『法言』ともいう。

#### 朱子語類・・・百四十巻

南宋の思想家朱子（朱熹の尊称）の語録。1270年、南宋の黎靖徳（れいせいとく）が、朱子とその門人たちとの問答を三十五項目に分類して収録したもの。朱子と朱子学派の思想を研究する重要な資料。日本には、鎌倉時代末期に伝来した。